ゆい・まーる

★ＶＯＬ３　令和２年８月４日発行

絵本の楽しさをおすそ分け

■「いっぽ、にほ…」

シャーロット・ゾロトウ／文
ロジャー・デュボアザン/絵

古いけれど読める・伝える力がある作品。オリジナルの出版は１９８０年で、日本での出版は２００９年。文・絵ともに２人の作者はベテランの絵本作家。●幼い女の子と母親が散歩をしながら互いにいろいろな発見をする物語。おとなが見逃してしまう道ばたの小石や風にゆれる洗濯物などに目を奪われる女の子の新鮮な感覚を、絵と文の両方で表現しています。●文では省いている女の子と母親の気持ちをページごとに色づかいを変えて伝えているところが巧みです。お母さんに読んでもらいながら絵の隅々まで楽しむ子どもは気づくかも…。●最後のページは、読み手のお母さんへの温かなメッセージ。３歳くらいから。

■「どうする　どうする　あなのなか」

きむらゆういち／文　高畠純／絵

タテに、しかも下に向かって伸びていくふしぎで楽しい作品。３匹ののねずみとそれを追いかける２匹のやまねこが深い穴の中に落ちてしまいます。●普通な

ら食べる側・食べられる側が対等に渡りあい、くすっと笑える話に仕立てているところが魅力です。●穴からどうやって抜け出るかを延々と相談しつつ、それがそのまま笑いにつながり、最後には文・絵ともに熟練のプロならではの仕掛けが用意されています。安心して物語の展開を楽しめます。４歳くらいから。

■「テツコ・プー　ふうせんになったおんなのこ」

児島なおみ／作

タイトルそのままに最後で気持ちがすっきりする作品。●朝から機嫌の悪いテツコは「プー」とした気分でいっぱい。弟のほっぺをつねり、お母さんに怒られてもあやまりたくない。お母さんがプーとしていると風船みたいにどこかへ飛んでいくよと言われ…あれれ、本当に風船のように浮かび、窓から飛んでいきます。●風船になったテツコが空を飛び、風やカラス、木と交わす会話が楽しい物語。●テツコの機嫌の悪さが良く分かる表紙の絵とページをたぐっていくうちに変わっていく顔の表情も作品の魅力。４歳くらいから。

絵本のお届けサービス「ペンギンくらぶ」で好評を得た１冊

■「あついあつい」
垂石眞子／作

くり返しと決まり言葉を楽しむ作品。●暑くてたまらない日、ペンギンが日陰を見つけ涼んでいると、それはオットセイが作った日陰。ペンギンとオットセイが日陰を探して歩いて行くと…。「暑さと日陰」をキーワードに、くり返しながら少しずつ大きな動物が出てくる楽しさにはまります。●「くり返しながら変化していく」のは絵本の定番。●この絵本を楽しんだ子どもは、このくり返しと決まり言葉の「だれだ」が気に入り、笑いながら何度も読んでもらったとのこと。●最後のページで暑さを吹き飛ばし、スカッと気持ちになれます。２歳後半くらいからどうぞ。

本との出会いを ボーイズ＆ガールズに

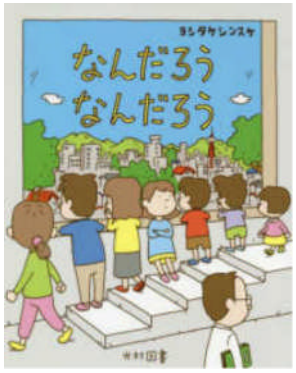
■「カラスてんぐのジェットくん」
富安陽子／作　植垣歩／絵

サービス精神いっぱいの楽しい作品。●昔話に出てくるカラスてんぐの少年を主人公にして、おもしろさをこれでもかと詰め込んだお話。●作者は日本古来の伝説やふしぎなことを題材にたくさんの物語を書いていますが、ここではカラスてんぐの家族のくらしや小学校でのてんぐうちわの勉強など、読者の対象としている小学校低学年の子どもたちが興味を持ち、わくわくするような味付けをしています。読みやすい文とほんわかした絵は、読書が苦手の子にも最適。

■「くろりすくんとしまりすくん」
いとうひろし／作

北の森の中で「くろりす」くんと「しまりす」くんが出会いました。同じリスでも２匹はかなり違います。くろりすくんは、木の上で暮らし、冬は秋のうちに地面に埋めた木の実を食べて過ごします。しまりすくんは地面に穴を掘って暮らし、冬は穴にためた木の実を食べながら冬眠します。得意なことや苦手なことも違います。性格もかなり違います。でも２匹は一緒にいると楽しく、満ち足りた気持ちになります。友だちなのです。●この物語では、２匹の心のうちには触れません。でも、物語を読む子どもたちには、２匹の気持ちが手に取るように分かるはずです。２匹が別々に過ごす冬の間のできごとは、いとうひろしさんらしい淡々とした文章ですが、感動的。ただただウマい！小学校低中学年に。

■「なんだろうなんだろう」
ヨシタケシンスケ／作



作品の中の言葉を紹介します。「いつも、ちょっとずついろんなことを考えたほうがいいと思う。なぜなら、そのほうがおもしろいことが増えるから」。●見開きのページ全体で１つのことについてあれこれ頭を働かせ、「なんだろう」を考えてみる作品。〈がっこう〉〈たのしい〉から始まり、〈ふつう〉〈夢〉まで１２もの

〈なんだろう〉が用意されています。最後の見開きページには、〈自分で考えるなんだろう〉のヒントがいっぱい。小学校低学年からおとなまで。

■「ルドルフとノラねこブッチー」

斉藤洋／作　杉浦模茂／絵

いつまでも読み継がれるシリーズの５作目で最新作。１作目の「ルドルフとイッパイアッテナ」の発売は１９８７年。３０年以上も前です。●児童文学の目利き／赤木かん子さんは、著書の「かんこのミニミニ子どもの本案内」（１９９６年）の中で、「…日本児童文学界にようやく〈現代〉を持ち込んでくれた、斉藤洋の登場です。…子どもたちの、とくに男の子の熱狂ぶりはたいしたものでした…。ホントに子どもって見る目があるよ。そうしてこの１作目から、斉藤洋の１つめのテーマ…男の子がある時期を乗り越えて大人、とまではいかないにしても青年くらいまでに成長する…がすでに出ているように思います」と書いています。●主人公のルドルフは、ノラねこと飼いねこの中間で、兄貴分のイッパイアッテナや友だちのブッチーらと町の中で暮らす少年のねこ。今回、ルドルフは「教養」という言葉を多用します。ねこにとっての教養って何でしょう？ブッチーの元飼い主が住むところまでの冒険旅行も一緒に楽しめます。●読み終えたら、きっと１作目から読み始めることと思います。このシリーズにはそんな力があります。がんばれば、小学校低学年から読めます。昔、子どもの頃にこのシリーズを読んだおとなにもぜひ一読を。

■「赤毛証明」

光丘真理／作

校則を題材にして「普通って何？」を問いかけてくる作品。●主人公の堀内めぐは、私立中高一貫校の中１の女の子。入学して早々、生まれつきの赤毛が校則にひっかかり、生徒手帳に「赤毛証明」の大きなゴム印を押され、それを見せることで毎朝のチェックを逃れることになりますが、ふと「私ってふつうじゃなのかな」と疑問を持ちます。●物語はここから始まり、めぐは「ふつうと特別」を身近なところから考え始めます。親友のサワちゃんのお母さんはシングルマザー、幼なじみのひろは車いすバスケットの選手、児童館で出会ったクラスメイトの吉川さんは保健室登校、赤毛証明のゴム印を押した強面の教師ゲニンが案外生徒思い…。見方や関係によって「ふつうと特別」はそのときどきで入れ替わる…めぐは、サワちゃんとともに、このことを夏休みの自由研究で明らかにすることにチャレンジ。●いろいろ考えさせられるエピソードが満載で、最後にめぐとサワちゃんが出した答えがとってもステキ。全力で生きているストレートさが伝わってきます。

■「サンドイッチクラブ」

長江優子　／作

読み進めていくとタイトルと表紙の絵の面白さが分かります。●中学受験を前にして、なりたい自分ややりたいことが見つけられない珠子と祖母が常に語り続けた大きなウソに心をとらわれ、アメリカ大統領になって世界を変えることを夢想する成績抜群のヒカルが砂の彫刻／砂像（さぞう）づくりのチーム／サンドイッチクラブを結成。●２人は砂像づくりのコーチ役シラベさんから、誰もがどこいても世界の現実とつながっていることや素材の砂から〈自由な自分〉の大切さを教わります。●珠子〈タマゴ〉と強烈個性のヒカル〈ハム〉が、サンドイッチクラブの砂像づくりを通して互いに刺激し合い変化し、自分の未来をじっくり考える姿は、読み手の心に響くことでしょう。小学校高学年から中学生に。

■「秘密の道をぬけて」

ロニー・ショッター／作

アメリカに奴隷制度があった１８５０年代の物語。当時、アメリカ南部から逃れてきた奴隷の黒人たちを自由の地カナダへ逃がすために、「地下鉄道」という組織がありました。黒人たちをかくまう家族／家が「駅長」で、黒人たちを馬車で運ぶ人たちが「車掌」。●ある夜、駅長を務める１０歳の女の子アマンダー家に「奴隷の所有者」から逃げてきたハンナー家がひっそりとやってきます。●アマンダと同い年のハンナー家を秘密の部屋にかくまい、彼らを追いかけてきた奴隷捕獲人の手から守り、カナダへ逃がすため次の車掌に送り届ける物語で歴史を背景に緊張感にあふれています。●同時に、ハンナとアマンダの心温かく強い友情の物語です。ハンナが語る奴隷制度、奴隷の暮らしは、わずか１７０年前のこととは思えないほど非人間的。ハンナが求める「自由」を応援するために、アマンダが教える文字の書き方と読み方の場面は感動的。そして、奴隷捕獲人が探しに来る緊迫した状況は手に汗を握るほど。●最後のページは、「自由と友だち」の大切さを感じることでしょう。２００４年の出版ですが、現代のアメリカにつながる作品。中学生から。

■「カレーライス」

重松清／作

副題が「教室で出会った重松清」。教科書や受験問題に使用された短編中心の作品集。●あとがきで書いている「少年時代を忘れないように！」のメッセージが９編の物語に共通しています。●著者の子ども時代を反映させたかのような「北風ぴゅう太」「もうひとつのゲルマ」や親子・友だち・才能や公平さなど、子どもたちが直面する理不尽だったり答えや出口が見えないことを題材にしながら、一緒に考えようと誘ってくれる物語ばかり。●表題の「カレーライス」は、子どもの成長をカレールウの「甘口」から「中辛」に例え、男の子の成長とそれに気づきにくい父親との関係を、子どもの側から思いがけないひと言が飛び出ることでホッとする場面に…。●作者が用意する「さりげない」人の存在と言葉が随所にあふれ、子どもたちが現実に立ち向かうエールになっています。小学校高学年から中高生に。

★ おまけ ★

●今、児童文学の作家でもっとも人気のあるヨシタケシンスケさんの作品（絵本・エッセイなど）を紹介します。●常呂図書館にある本ののリストです。

＊「あるかしら書店」（ポプラ社）
＊「思わず考えちゃう」（新潮社）
＊「こねてのばして」（ブロンズ新社）
＊「ころべばいいのに」（ブロンズ新社）
＊「ふまんがあります」（ＰＨＰ）
＊「ねぐせのしくみ」（ブロンズ新社）
＊「みえるとかみえないとか」（アリス館）
＊「ヨチヨチ父 とまどう」（赤ちゃんとママ社）
＊「なんだろうなんだろう」（光村図書出版）
＊「それしかないわけないでしょう」（白泉社）
＊「このあとどうしちゃおう」（ブロンズ新社）
＊「ぼくのニセモノをつくるには」（ブロンズ新社）
＊「わたしのわごむはわたさない」（ＰＨＰ）
＊「もうぬげない」（ブロンズ新社）
＊「もしもの世界」（赤ちゃんとママ社）
＊「ものは言いよう」（白泉社）
＊「欲が出ました」（新潮社）
＊「なつみはなんにでもなれる」（ＰＨＰ）
＊「りんごかもしれない」（ブロンズ新社）
＊「おしっこちょっともれたろう」（ＰＨＰ）